佳作

知的書評合戦体験記

熊本県 熊本市立白川中学校二年　堀尾 真由

あの日、私は人生最大の挑戦をした。

こんな書き方をするとかなり大げさに聞こえてしまうが、この十三年間の中での一番大きな出来事は、間違いなくこれだ。

ビブリオバトル―知的書評合戦。自分が面白いと思った本を五分間で紹介し、「どの本を一番読みたくなったか？」を基準に投票でチャンプ本（最多票を集めた本）を決める、というのが公式ルールだ。

きっかけは、六月の図書委員会。次の七月の集まりでビブリオバトルを開催する、と知らされた。私は、小学生の頃に読んだ本の影響で、ビブリオバトルをしたいとずっと思っていたため、すぐに発表者に立候補した。

私が選んだのは、安澄加奈さんの『はるか遠く、彼方の君へ』という長編小説。何度も読み返した、特別な一冊だ。作品の魅力を伝えたい一心で、原稿づくりやその暗記、発表練習をしていると、あっという間に本番当日を迎えた。

発表者は、私を含めて五人。くじの結果、私の発表の順番は三番目になった。

前の二人の発表に聞き入っていると、すぐに私の番がきた。

聞いている人の目を見て話す。一つの方向だけを見るのではなく、ゆっくりと全体を見渡す…ポイントを意識しながら、一生懸命話した。

投票は、一番読みたいと思った本に手を挙げる形で行われ、その後すぐにチャンプ本が発表された。

「チャンプ本は、『はるか遠く、彼方の君へ』です。」

私が紹介した本だ。

よく小説などで「……！」というかぎかっこを見かけるが、あの時の気持ちはまさにこれだったと思う。声こそ出ないが、確かに心が動いた。この発表によって、私の大好きな作品に興味を持ってもらえたことが、本当に嬉しかった。私の思いは、きちんと伝わったのだ。

これまで私は、自分の思ったことを言葉にするのが苦手だった。うまく表現できない自分が嫌で、表現することを諦めてしまっていた。けれど、今回の挑戦で学ぶことができた。一生懸命吟味した言葉によって、自分の伝えたいことがうまく伝わることもあるということを。もちろん会話では、今回のような原稿をつくることはできない。相手の言葉を受けて、瞬時に何か返さなくてはならないため、言葉を吟味する暇などない。これからも、自分の気持ちをうまく言葉にできずに誤解されたり、自己嫌悪に陥ったりすることがあるかもしれない。それでも、いじけてしまわずにその都度言葉と向き合い、原稿のない会話も十分に楽しめるようになりたい。そしていつかは、人の気持ちを明るくするような言葉を使える人になりたいと思う。